2023年度震災復興支援基金
「パル未来花基金」助成グループ報告会

福島子ども支援プロジェクト・西多摩

震災

パルシステム東京 震災復興支援基金「パル未来花基金」
「組合員への助成活動レポート」

震災復興支援基金「パル未来花基金」の助成を受けて、復興支援活動に取り組みました。その取り組みについて、組合員の皆さんにご報告します。

グループ名	福島子ども支援プロジェクト・西多摩
支援対象者・エリア	福島県伊達市
企画開催地	A．福島県伊達市　及び　B．東京都羽村市を含む西多摩地域の方々
企画名称	A．福島ツアー、（講演会･交流会・津島見学など） B．学習会（東京都西多摩地域）
実施期間	A．福島ツアー、2023 年 10 月 27 日～29 日, B．学習会①2023 年 11 月 26 日②2024 年３月 23 日

支援活動の目的・内容・感想
（どうしてこの活動をはじめたのか、どのようなことに取り組んだのか、取り組んだ感想など）

今年度、福島の子どもたちの保養キャンプを予定していましたが人数が集まらない為中止となりました。例年行っている福島の実情を知るツアーといままで交流のあった伊達市の方々との子ども保養キャンプ参加者の交流会を盛り込みました。次年度に向けて進めるために、意義のある福島ツアーとなりました。以下、報告です。

A．福島ツアーについて　（10 月 27 日、28 日、29 日の 2 泊 3 日）

① 10 月 27 日（金）13:30～、郡山市文化センター
・講演会、「震災の後がつらかった！」講師　蟻塚亮二さん
ぜひ聞きたいと思っていた蟻塚亮二さんの講演会も付け加えて実施しました。蟻塚亮二さんが 27 日郡山にいらっしゃるということで郡山で講演会を行いました。
蟻塚亮二さんのお話は災害被災者の内面の苦悩･不安に焦点を当てることの重要性を私たちにおしえてくださいました。住居の被害等に目が行きがちですが内面の精神的ダメージの大きさを示してくださいました。

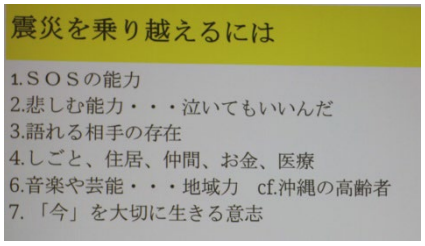
② 10 月 28 日（土）13:00～、梁川会館、キャンプ参加者。飯田議員（伊達市議会議員）
飯田議員より「伊達市バイオマス発電」の問題点のお話を聞きました。
キャンプ参加者（2019 年度）2 世帯を交えて子ども達の様子や伊達市の原発事故に対する様子の交流と今後の”保養キャンプ“の進め方等を意見交流しました。

③ 10 月 29 日（日）「俺たちの伝承館」見学。汚染水監視テント支援。津島町見学
「俺たちの伝承館」で中筋さん･堀川さんのお話を聞きメディアでは扱わない被災者の実情を知ることができました。汚染水監視テントは、請戸川河口で連日放出の監視を続けています。
津島町は、避難解除になっても、放射線量は高く人の住む条件を満たしていませんでした。道路脇のモニタリングで２マイクロシーベルト。持参の測定器だと４マイクロシーベルトもありました。

震災

Ａ．福島ツアー

① 蟻塚亮二さん講演会（27 日）



② キャンプ参加者との交流会（28 日）

③ 「俺たちの伝承館」”汚染水監視テント支援“”津島町見学“(29 日）

◇「俺たちの伝承館」◇

◇“汚染水監視テント支援”◇

震災

◇津島町見学◇

B:学習会①2023 年 11 月 26 日（日）

『福島の１２年半、そして今』～原発作業員を追い続けて～

講師：片山　夏子　さん（東京新聞記者）

　片山さんは、原発事故直後の３月１２日から取材を始めたそうです。原発作業員の取材を始めたのは８月に入ってからなそうです。その後は、寝ても覚めても福島原発で働く作業員の人達のことを考えるようになったそうです。東電が緘口令を敷いていたため取材は困難をきわめたようでした。作業員の年代、出身地も様々で独身者･妻帯者と多様で思いや悩み等多種多様であることが分かりました。多くは東電の子会社、孫会社で働く人達です。待遇も良くありません。
放射能の健康面の不安等を抱えながらの作業を日々行っている様子を詳しく聞くことができました。事故を起こした原発を廃炉にするにはこのように劣悪の環境で働く人達のことを忘れてはならないと考えさせられました。東電本社･幹部責任者とは一緒にできないと考えさせられました。

②学習会：2024 年 3 月 23 日（土）

学習会『福島原発事故１３年―被害者からの訴え』

講師：鴨下美和さん、全生さん

福島原発事故から 13 年、被害者からの訴え、というテーマで、当事者の鴨下美和さん・全生さん（息子さん）に福島原発事故の被害者の生の声を聞きました。２０１１年原発事故により家族４人で東京へ避難したそうです。いわき市には国からの避難指示がなかったため自主避難者となりより過酷な厳しい避難生活となりました。鴨下さんのお話からいわき市の放射能汚染が少ないのではなく放射能測定地域に福島市やいわき市など人口密集地を除く形で上空からの放射能測定をしたのではないかという報告を受けました。政府の意図的なデータに基づく避難地区作りがなされたことになります。この政府の方針は、今なお続いています。汚染の過小評価、復興優先で住民の健康・命や生活が蔑ろにされる中での避難生活はとても大変だったことが分かりました。息子さんの全生さんは、当時８歳でした。一時、避難生活に疲れ鬱状態にあったこともあったそうです。現在大学生になり原発事故の実情や避難生活の大変さを多くの若者に語りかける活動をしていました。